

## ■ルール

リーチに対する一発・裏ドラなし

順位点はトップから順に+12・+4・▲4・▲12

## ■システム

認定プロをはじめとするシード選手と予選を勝ち上がった選手、合計32名で争われる。

ポイント持ち越しの半荘6回戦。4回戦進出16名、準決勝5回戦進出8名、決勝6回戦進出4名。

(文中敬称略)

※ 文中において(P)は認定プロ、(T)はツアー選手、(一)は一般、を表す。

## 1回戦～3回戦

1回戦抜群のスタートを切ったのは穴澤晃一(一)。+57.8の大トップだから、順位点の+12を考慮しても75800点を稼いだことになる。なんでも、別のタイトル戦にも勝ち残っていたが、勝ち進むとイン横浜と日程がバッティングするため辞退したそうだ。それだけイン横浜に集中しているわけで、その気合が良い方向に現れた。

穴澤は2回戦でも、



のテンパイをツモ などの変化を見て慎重に から捌き、すぐに4枚目の でロン。確実に2着をものにした。3回戦も2着でまとめ、トータル69.3は途中経過ながら首位である。

もう一人好調だったのが、日本プロ麻雀棋士会のエース級・鈴木たろう(一)。3連続トップで67.0は穴澤には及ばないものの、準決勝進出は確実だ。

逆に振るわなかったのは、月刊プロ麻雀誌上で鈴木たろうと共にオカルトバスターズとして活躍した小林剛(P)。2回戦終了時には、つかつかと私の方へやって来て、「3回戦、代走してください」だと。もちろんジョークなのはわかるが、そんなに調子が悪いのか。成績表を覗き込むと、この時点で2ラスの最下位で4回戦進出は絶望的。ま、たまには惨敗もいいでしょ、勝ってばかりじゃつまんないもんね。

3回戦が終了し、認定プロでは松井一義、井出洋介、高見沢治幸、木村和幸、小林、ツアー選手では武則輝海が敗退となった。

## 4回戦

4卓16名で行われる4回戦は、上位8名が準決勝に進出となる。とりあえずの目標は卓内トータル2着だが、先のことを考えるとできるだけポイントは伸ばしたいところだ。

各卓のトップ者は、穴澤(一)、近内亮太(T)、須藤浩(P)、伊東直毅(一)で、この4名は準決勝進出確定。特に穴澤はトータルトップからのトップ獲得で91.5ポイント、頭ひとつ抜けた存在となった。

持ちポイントの多かった鈴木たろう(一)、藤城康雄(一)も準決進出確定で、残る2席は、石原真人(T)、忍田幸夫(P)が獲得した。

ここで敗退となった認定プロは、柏原純、原浩明の2名。ツアー選手では山本裕司、黒澤耕一郎、遠藤陽一が敗退となった。

8位の忍田と9位の奥脇幸太(一)との差は僅か1.8ポイント。忍田の最終局はこんなだったそうだ。



忍田は3着目、アガりさえすれば2着にはなり、トップはハネツモで逆転できる状況。ただし、トータルポイントを考えると500・1000をアガっての2着では準決勝進出は微妙とのこと。

あなたならどうするか？

忍田の決断は打  でのリーチ。うまく行く可能性は少ないが、 ツモなら半荘でトップになり、準決勝での立場がぐっと楽になる。

結果は、すぐに  ツモで1300・2600のアガリ。平均打点重視で  切りリーチなら2000・4000となっていたわけだが、戦略としては打  リーチに分があると思う。

「この2.8差で届かなかったら、ワシ熱い」と言っていた忍田だが、準決勝進出に胸をなでおろしていた。

4回戦終了時の上位ポイント

1位穴澤91.5、2位鈴木56.4、3位藤城40.0、4位近内36.7、5位須藤33.8、6位伊東33.0、7位石原27.7、8位忍田24.3

1位から8位まで67.2差はやや縦長の展開。次の準決勝戦の結果によっては、ワンサイドゲームになる可能性もある。

## 2004年度ツアー第7戦・μカップin横浜観戦記

麻将連合ツアー選手・三原孝博

### 準決勝

B卓

起家から近内亮太(T)36.7、忍田幸夫(P)24.3、鈴木たろう(一)56.4、伊東直毅(一)33.0

鈴木が少し抜けているが安泰ではない。さて、どうなるか。

東1局その1 ドラ 

開局から火の手があがる。まずは、北家・伊東が7巡目にリーチ。



の高目三色。

これに対して親・近内が反撃に出る。



打  でヤミテンに構えたのが9巡目。決着はすぐについた。伊東が  をつかんで12000点プラスリーチ料の献上。

絶好のスタートを切れた近内だが波に乗れない。いや、周りが乗せなかったと言うべきか。東2局はチートイツテンパイから親・忍田のリーチに放銃。東3局その1は一人ノーテン。東3局その2の3巡目リーチも忍田に捌かれてしまった。

途中、鈴木も細かいアガりをものにし、伊東も1300・2600で少し息を吹き返し、オーラスを迎えた時点での点数状況は、忍田+13.1、近内+1.6、鈴木▲6.2、伊東▲8.5となっていた。

これに4回戦までのポイントと順位点を加味すると、忍田49.4、鈴木46.2、近内42.3となる。伊東はラス親なので、とにか

く連荘することで道が開ける。

決勝進出が4名なので、準決勝では卓内2番手に入ることがひとつの目安になる。

さて、このオーラス(ドラ )どうなったか。

まずは、鈴木がタンヤオドラ1のチーテンを入れると、伊東も  の先ヅケながらチーテンで対抗する。

後の談によると、このとき忍田は親に対して安全な牌ならば、鈴木に差し込もうと思っていたらしい。しかし、鈴木待ちである  は親に対しても打ちづらい牌であり、差し込むことはできなかった。

さて、局面が長引くうちにトータル3番手近内にもテンパイが入った。



近内の当面の目標は卓内2番手の鈴木で、差は3900点。ヤミテンに構えた場合、条件を満たすのは直撃かツモ。リーチなら誰から出てもオーケーになる。

巡目が深いこと、 共に場に2枚ずつ見えており四暗刻への変化は考えなくて良いこと、ラス親伊東は連荘が絶対条件であり勝負してくることなどを考えるとリーチをかける手も十分にある。

ヤミテンにも理はある。暗カンができること(事実次巡  を暗カンしている)。鈴木からの直撃が取りやすいこと。鈴木仕掛けの待ちが絞れたときに、その牌をつかんだら押さえて親のテンパイ連荘を期待できること。流局したときにリーチ料を供託しなくて済むこと。

近内はヤミテンを選択した。数巡後、鈴木が500・1000のツモアガリ。

これでトータルは、忍田48.9、鈴木48.2、近内41.8となった。3番手の近内は無理として、忍田、鈴木は決勝進出だろうと思っていたら、とんでもなかった。

準決勝A卓は、それまでトータル首位だった穴澤がラスで卓内最下位の石原がトップだったため大混戦となった。トータルポイントは、穴澤68.7、石原49.5、藤城49.0となり鈴木は無念の敗退となった。

では鈴木仕掛けの間違いだっただかという、そうは思えない。あのポイントで卓内2番手なら決勝進出の可能性は高い。忍田ですら、卓内2番手に落ちてもいいから鈴木に差し込もうと思ったくらいである。

## 2004年度ツアー第7戦・μカップin横浜観戦記

麻将連合ツアー一選手・三原孝博

### 決勝戦

起家から藤城康雄(一)49.0、忍田幸夫(P)48.9、穴澤晃一(一)68.7、石原真人(T)49.5

穴澤が頭ひとつ抜け出していて、残りの3人は横並び。穴澤はトップなら無条件で優勝、2着でもトップとの点差によっては優勝。残りの3人は穴澤を3着以下に落としながらトップを取りたいところ。

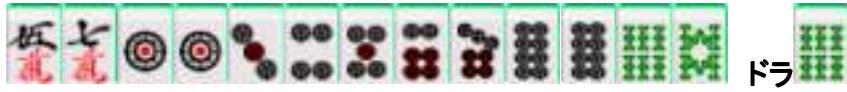


かに大変なことか。

8割の人が正解を出せる程度の問題でも10問連続で正解を出せる人はほとんどいない。10問連続で正解を出そうと思ったら、より1問ごとへの精度を高めていかねばならない。

こういった精度の高さとひきだしの多さが忍田の強さではないだろうか。

決め手となった3900オールはこうだった。



6巡目にこのイーシャンテン。次巡  をツモ切った。  はドラ表示牌を含め2枚見えている。ならば役なしで目一杯

に構えるより、ツモ  からタンヤオへの変化を残すということか。

8巡目に  をツモって役なしながらテンパイ。下家の穴澤から役牌仕掛けが入っており、自身も点数上追いかける立場ゆえ、押さえつけるリーチをかける人も多いただろう。しかし、忍田はヤミテンを選択。

10巡目にドラの  をツモって打  でテンパイ外し。13巡目に  ツモでテンパイに復帰し、14巡目に即  でツモアガリ。

決して奇抜な選択があったわけではない。が、同じ結果になる人は多くはないのではないだろうか。

穴澤の足も止まった今、逆転の可能性が残っているのは石原。2000点、2600点とアガって迎えたラス親では、リーチ・ツモ・ドラ1の2000オールを2連発。

特にふたつ目は、



から  切りリーチで  ツモ。これで忍田とは4600点差。逆転を匂わせるのに十分なアガリである。

さらに、その3ではドラ3のイーシャンテン。



長引いたが15巡目に  を引いてリーチ。これをアガれば昨年続くイン横浜連覇は目前だが、惜しくも流局。

次局は忍田に手が入った。4巡目テンパイで6巡目にツモアガリ。



これで忍田は原と並ぶμカップ4勝目。

μ発足時、代表を除くと唯一プロ認定された忍田は今でも皆の先頭に立つリーダーである。